

氏名	中村 奈緒子
ヨミガナ	ナカムラ ナオコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第580号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 結果、そうなりつつある世界に対してくり返されるちょっとした差し水とすべての祝福について 〈作品〉 結果、そうなりつつある世界に対してくり返されるちょっとした差し水とすべての祝福について 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小谷 元彦
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	伊藤 俊治
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	日比野 克彦
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	小沢 剛
（副査）			（	

（論文内容の要旨）

あらゆる事柄が暗黙裡に前提とされる中で私たちの生は成り立っている。その事実に対する馴染めなさを私なりに解きほぐす行為が、美術というものであった。例えばエコノミーという言葉は通常、経済という意味で理解され、ものの生産・分配・消費にまつわる諸活動の総体を意味する。この語の語源を探れば、古代ギリシャに遡り「家政」、そしてラテン語から近代諸語へ翻訳される過程で、神による世界の「配置」、有機的組織の「秩序」などと言ったように時と場に応じて変化を遂げてきた。その全てをたどることはできないにせよ、私は私自身のやり方で理解を行おうと考える。あらかじめ築かれたかのごとく見えた社会と私自身との接点を、再びそして改めて繋ぎ合わせようとする試み、それがつくるといふ行為であった。あたかもフィールドワークのごとくはじめられた美術という行いがだんだんとそのきっかけを覆い尽くしやがては生そのものへのフィールドワークと転じていく。本論文は自己と世界との配置を改めて問い直す試行錯誤であり、そうした思考と制作自体を重ね合わせたものである。

序章では以上の前提を掲げた上で、まず第1章ではことの起こりをフリーダ・カーロという人物に仮託し紐解いていく。そして第2章ではもう一人森村泰昌という人物を立てることで、なぞるといふことを通して起こる大きな動きや流れを見出していく。

第3章ではそうして始まった、つくるといふ行為の実践的な側面を私自身が実際に眺めている風景からひろい集めてくる。またその中で発見される、美術における単なる身体活動としてのあり方やその根源性ならびに重要性を第4章にてブルース・リーの創始した截拳道に照らして考えていく。

そうして起こり展開されてきた一連の事柄を第5章にて、ウィリアム・モリスという人物と彼自身の創作や社会主義的思考に触れることで、つくるといふ個人的な行いを社会全体での活動に押し広げていく。

第6章では、それらの意識を通して出来上がってきたものの存在に言及し、また同時にそういった意

識から大きく自立してひとり歩きを始めるものそれ自体について言語学に置ける中動態の考え方を借りることで全体を串刺していく。そしてつくるということや、やがてそれらが機能していく社会そのものについて触れることで終章へとつなげていく。

#### (論文審査結果の要旨)

2017年に亡くなった美術評論家ジョン・バージャーが「屈することなき絶望」という興味深いエッセイを残している。

瓦礫だらけになったパレスチナの探訪記だが、同時にそれは私たちの住むこの世界の記述でもある。

私たちの世界では何よりも言葉が瓦礫になってしまった。もはや何も担うことのない言葉の瓦礫は徹底的に意味を破壊され、筋の通った冷静な言葉も顧みられることはない。言葉はそこで起こっている出来事より遥かに矮小になり凍えている。そして恐怖も諦念もない絶望だけがここでは世界に対する一つの強い姿勢を生み出す。その姿勢は分かち合う方法であり、約束事や慰めや復讐の誓いに拠ることなく、なんとか答えを出そうとする方向である。歴史に反し、絶え間なく繰り返される問いに潜む欺瞞や敵意を解きほぐしてゆこうとする答えのない答えだ。

その簡潔で私たちの肉にまわりついてくるスタンスは、なぜ生まれてきたのかなどと問うことなく、人が生まれてくるのは繰り返し出現する時間を分かち合うためなのだと直感している。生成してくる時を共有するために、屈することなき絶望を持続し、その時間に直面するリスクを選びとることの大切さを確信している。

いささか唐突だが、本論文を読み進めながら、遠くにその「屈することなき絶望」を想った。論文中で「中動態」という言葉が繰り返されるが、もともとこの言葉はシリア生まれの比較言語学者で晩年は失語症に陥ってしまったエミール・バンヴェストの「動詞の能動態と中動態」(1950)で注目され、近年再び脚光を浴びている言葉だ。

受動態は中動態からその一様相として発生したという比較言語学が確立した事実には則り、古代イラン語やサンスクリット語などを専門とするバンヴェストの言語学的探究により能動態と受動態の二項対立を越え、西洋世界の無意識の構造を、つまり言語が意識をつくりだしたことを明らかにした。中動態では、動詞は主語がその過程の座であるような状態を示す。つまり中動態では、主語により表示される主体は過程の最中にあるものなのだ。また統合失調症では、中動態的な主体が成立不全に陥っているという精神分析学の木村敏の指摘も興味深い。

そのような揺籃する主体をなんとか宥めながら、本論は近代的主体が直面する諸問題をアーティストの内面心理、作品の有り様、社会主義、身体行為、経済活動、家政、アーツ&クラフトなど多岐に渡る要素を散りばめながら解きほぐしてゆく。その論理は一筆書きで始点から終点まで何重にも円環を描いてゆくような独特の歩み方をし、トートロジカルではあるが読み手の主体の基底もざわめかす。

「見ることは見られることである」という美術の原点、二つの主体の同時的成立の秘密も仄めかしながら、きちんと絶望したいという“屈することなき絶望”のスタイルを貫いた姿勢を本論文では評価したい。

以上の理由で博士号に値すると判断した。

#### (作品審査結果の要旨)

ものを作る行為があるからものはこの世に存在している。その行為が人によるものもあれば、そうでないもの、つまり自然の行為であるものもある。そのようなものが混在してこの世はできている。そんな中で作者はものを作ることを考えながらものを作る。作りたいという衝動は何故だか作者の中に沸き起こる。その起因となるものがきつとあるのだろうけれども、そこに理由なり、理屈なりを求めたところで作りたいものは変わりはない。ならばその状態をそのままいじることなく、身体に内包させながらその衝動に素直に身体を反応させてみてみよう。作者の身体はものを作ってはいるものの、そのもの

は作者に作られている関係にあるとは言い切れない。視点はいつも浮遊する。

今回の大学美術館での博士展での作品展示は中村が学部から大学院、博士課程を通して見つめて来た姿勢が展開されている。陶器、木材、金属、七宝、ガラス、石など大学で扱える多くの素材で制作を試みて来た中で、都度反応して来た身体は、今回は石彫を展示の中心に置き、その周りには木工で製作した扉、家具や、金属で製作した脚立などが置かれてある。その中に作者が製作したものではない印刷された段ボール箱が配置されている。これらの配置は偶然の無作為的な配置のように見えるが作者の中には必然で作為的な配置であったと言えるだろう。ものの配置には整然としているにしろそうでないにしろ、何かの企てが存在してしまうのではないかと考えるが、作者はそこから逸脱したいと考えている自分がいると自覚する。最終審査会での作品展示の中に於いての作者自身の作品の解説は、人という作為を持ってしまう作る側と作為を持たない作られる側との関係をテーマにしている作者にとっては、言葉だけを身体から、作品から切り離して出現させることはせずに、言葉を視覚化した画用紙を紙芝居的に使って、身体も作品の中で徘徊させながら、自らの世界観を鑑賞者に伝えてく表現になっていたのは、作者が言う「中動態：過程の中で成立し、過程の中で変化していく」ことを実践した行為であり、高く評価できるものであった。作品制作に向かう姿勢、そこから生み出されて来たものの空間における展示、最終審査における作者の作品が存在する空間における振る舞いなどの全ての事柄に関して優れた作品である。よって合格と判断いたします。

#### (総合審査結果の要旨)

中村奈緒子は先端芸術表現科という学科では珍しく、学部時代より手作業による様々な制作手段を駆使し、そこにまつわる時間、物の在り方を考えて来た。博士提出作品においても、制作手段は木工芸やスタンドグラスなどの工芸的技法や彫刻の技法である石彫を選んで制作し、自宅で制作したハンドメイドのパッチワークキルトも並べている。その中には一見するとわからないのだが、自作で蝶番から作られた脚立と既製品の脚立両方が配置され、制作物と既製品の境目は意図的に消去されている。時間をかけて作られたとわかる七宝つきのヒトガタの石彫などに対し、段ボールや脚立等の既製品、既製品の一部だけ手が入った棚や台車、パイプイスが併置され、丸テーブルなどは本人が全て制作したにも関わらず、時間の痕跡を消され、自然に空間へ溶け込まされている。さらに幾つかの彫り込まれた石彫に対比するように制作途中の石彫も置かれている。これらの制作物に内包される時間や人為的介入の関係は、似て非なるもの、もしくは相似形をなしながら、空間に存在させられている。長時間かけて作られたオブジェクトは無造作に投げ出されるもの、丁寧に棚に収納されているものがあり、自らの手で作られたテーブルの上に作りかけの石彫が敢えて置かれる。時間軸の構成が混沌とした中で、各々のモチーフから感じとれる労働とも徒労ともとれるやりとりが残された現場は、中村の中心を成す態度である中動態を明確に示している。中村が論文で語る中動態とは制作プロセスでの素材とのやり取り、周辺制作環境との折り合いなど、本人のその場の反応によって、変化するものであると考えられる。今回の博士提出作品では鑑賞者にとってそれらの分別が難しすぎるという問題点はあるものの、中村の意志と態度は、以上の作品の考察から十分に感じとれ、評価できるものである。

作品を作る事の目的は、論文中で明確にされる。それはトートロジーのように小さな円環になっているのだが、その射程はやがて経済との関係まで結びつく。その小さな環は、反発し合い、裏返し、そして元に戻り、社会という枠組みの大きな環に影響を与える。フリーダ・カーロから、それをなぞる森村泰昌、直接的な影響を与えたディエゴ・リベラという相関図から出発し、社会主義の芸術家であるウィリアム・モリスまで展開されていくのだが、それらの人物が選択された理由は、思想的なものでなく、大きな社会に対する小さな個の態度として共感をもったからである。この態度こそが中村の基底にあるものであり、制作という困難に立ち向かう誠実さと制作中に出現する矛盾の連続は、パタイユの内的体験の実践とも受け取れるだろう。中村奈緒子のハンドメイドによる小さな企ては閉塞した円環のように思えるが、実際は思考とプロセスの過程で、微妙なズレを生じ、円周を徐々に拡げ続けていく。そのズレの発生を祝福するため、中村は時に差し水を与え、家事をするかのように今日も作品を地道に作り続

ける。制作に対し、悩みは常に抱えてしまうがひたむきな態度に偽りはない。

作品、論文ともに高い評価をされた中村奈緒子は博士号に相応しいものとして十分に判断できる。